

# 令和5年度伝統文化継承事業

## ぐんまの伝統文化調査報告

### ○実地調査（聞き取り調査）の概要

群馬県内の各地で伝承されてきた民俗芸能や、祭り・行事等は、人々の絆を深め、地域社会の核の結びつきとなっていました。しかし、時代の流れとともにその基盤となる共同体が変化し、伝統文化も衰退の危機にさらされています。貴重な伝統文化を守り伝え、次世代に継承するために県内の伝統文化の状況を把握し、継承に向けての資料とする為、令和4年度に実施した「群馬県伝統文化調査の追跡調査」の結果を基に、民俗芸能や祭り・行事の存続の現状、新型コロナウイルス感染症の影響、次世代への継承・普及状況、今後の課題等について、各団体の代表者等へ聞き取り調査（電話による調査も含む）を行った。

### ◇令和5年度実地調査地◇

| NO. | 市町村 | 名称       | 伝承団体名       | 上演期日             |
|-----|-----|----------|-------------|------------------|
| 1   | 明和町 | 中谷の山車    | 中谷おはやし保存会   | 7月第1・日曜日（中断中）    |
| 2   | 藤岡市 | 立石新田獅子舞  | 砂原獅子舞保存会    | 春祭り(3月)、秋祭り(10月) |
| 3   | 高崎市 | 天神の獅子舞   | 新町八幡宮獅子舞保存会 | 不定期              |
| 4   | 前橋市 | 大峯神社太々神楽 | 大峯神社太々神楽保存会 | 5月八十八夜（中断中）      |
| 5   | 嬬恋村 | 袋倉獅子舞    | 嬬恋村消防団第9分団  | 2月か3月の午の日の前日     |

### NO.1 中谷の山車（なかやのだし）

所在地：邑楽郡明和町中谷

伝承組織：中谷地区（中谷おはやし保存会）

調査日：令和5年7月1日（土）

#### <伝承状況>

中谷の山車は、江戸時代後期から地域に伝わってきた。山車の柱は尾曳城（館林市）を解体した際に出た木材を、飾りについては民家の木を伐りだしてつくられたと伝承されている。全て、人から人へ伝えられてきたものであり、記録は残っていない。また、山車のタイヤは、50年以上前は木製で、当時は、山車の保管してある教習所から川俣駅の前を通り、長良神社まで引いていった。その後、長らくの間、お祭りは行われてきたが、山車については飾ってあるのみで、巡行はしていない時期が続いた。

（悉皆調査からも平成8年から中断されていた事が分かっている。）平成21年（2009）に、島田・冨塚（現町長の父）・笠原の3名で中谷新囃子と銘打って、お囃子を復活させた。（譜面は存在しない為、頭で覚えていたお囃子のリズムを書き出し、模造紙に書き記して、伝承のために残した。）

### <復活の経緯>

復活のきっかけとしては、補助金（県のものか宝くじかは定かではない）を使用し、太鼓の購入と山車の修復を行った事が上げられる。まず初めに太鼓を購入するために補助を受け、新調した太鼓でお囃子の稽古・特訓を開始。次に、老朽化により動かすことが出来なくなっていた山車のタイヤを交換し、山車が引ける状態にした。平成27年、40年ぶりに「おはやし保存会」を立ち上げ、山車を引くこととなる。

### <新型コロナウイルス感染症の影響>

例年、尾島から先生を呼び、5月の連休明け頃から育成会を通して習い事のような形で、放課後、お囃子等の練習を続けてきたが、新型コロナウイルス感染症の影響により、3年間活動が出来ずにおり、コロナ禍前に活動続けてきた最年少の子どもも、現在、中学2年生となっている。1人か2人でも繋がってくれば良かったが、これからまた1からやらないと、太鼓を叩ける子どもがいない状況である。

### <今後の課題等>

中谷地区は、元々の家は60戸くらいだったが、現在は500弱位に増加している。（ほとんどが外から転入してきている。）お囃子を継続させていくためには、子どもたちだけではなく、子どもたちの世話をしてくれる大人の参加（保護者の協力・活動への前向きな姿勢）が大きな課題となる。（練習時間について、放課後だったものを土日にする等、工夫も必要かと考えている）他の地区の話しでも、伝統芸能についてアンケートを行った結果として、アンケートでは続けたいとの意見があっても、実際に指揮をとる人がいない問題や、残そうと努力したが、残らなかった例もある。どれだけ賛同してくれる人がいるか、子どもだけでなく、大人（親世代）が積極的に動く事が重要となる。また、地区としての青年団のようなまとめ役が必要とも考えられる。

山車だけでは何とか繋がっていくと思うが、お囃子については、1度途切れてしまったので、復活が難しいかもしれない。お囃子の練習について、以前、学校で行ってみた事もあったが、定期的に来ていただける指導者がいない現状であり、まずは、地域で活動が出来ると良いと考えている。

今後、山車の修復費用等が必要だが、「群馬のふるさと伝統文化」支援事業補助金等、補助金を活用し、金銭的な問題を解決して行きたいと考えている。以前、山車のタイヤ修繕の際に、修復業者が分からず車屋さんを回ったが、修理してくれるところが無く、最終的に知り合いに依頼する事となり、塗装についても、通常のペンキ屋さんに依頼しており、修理の際、詳しい人のアドバイスが頂けると有難いと思っている。



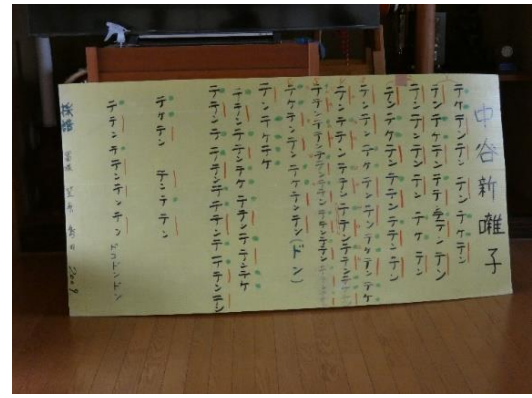
< 中谷の山車（正面）>



< 中谷の山車（背面）>



＜ 太鼓 ＞



＜ 中谷新離子 リズム譜 ＞

## NO.2 立石新田獅子舞 (たついししんでんししまい)

所在地：藤岡市立石新田

伝承組織：砂原獅子舞保存会

調査日：令和5年9月3日（日）、10月22日（日）

### ＜歴史・伝承状況＞

流派は稲荷流阿久津派で一人立ち三頭獅子舞である。天和2年（1682）、村名が伊勢島新田村から立石新田村に改名された時期に、他地区（高崎市）より伝承されたものと考えられる。文久2年（1862）に、獅子頭の塗り替えや、昭和22年（1947）、春祭りに舞を奉納等、記録が残っている。戦争等により何度か休止した時期もあったが、昭和54年（1979）、神社総代と有志により復活した際、これまで「立石新田獅子舞」と言われていた時期もあった団体名を「獅子舞保存会 砂原獅子舞組」とした。（「砂原」とは俗称か正式名称かは定かではないが、昔の地区名である。「砂原」→「伊勢島村」→「立石新田」と改名。）その後、後継者不足等により徐々に活動が難しくなり平成11年（1999）、正式に休会となるが、平成29年（2017）、再び神社総代と有志により復活の準備を開始、平成30年（2018）「砂原獅子舞保存会」として復活となる。それ以降、新型コロナウイルス感染症の影響等もあったが、1人、2人での奉納は続け、令和2年より縮小奉納、そして、令和4年の伊勢島神社秋祭りにて43年ぶりに区内を巡行する事となる。

### ＜平成30年、復活に至るまでの経緯＞

平成11年に休止となってから獅子頭等を神社総代で保管していたが、平成29年、今後についてどうしたら良いか、修理するかどうか等の話し合いとなり、過去を遡っていくと歴史のあるものであり、残していこうと決まる。山車や神輿等であれば、見様見まねで出来ることもあるが、神楽や獅子舞はその様なわけには行かず、昭和54年に復活した時の笛・踊りの担当者が1名ずつ残っていた事も復活に至った大きな要因であった。はじめから子どもに教えるのではなく、まずは大人が練習を開始し、現在は30代の踊り手や、小学生、園児等の子供も加わり、獅子舞を行っている。

獅子頭については、長期にわたり修理されておらず傷みが著しかった為、県・市の補助金を活用して修復、令和5年度には天狗面の修繕も市の補助金を使用して行った。

### ＜新型コロナウイルス感染症の影響＞

コロナ禍であっても、獅子舞は屋外で距離をとって行い、また、獅子頭も被る等、山車や神輿の様に密になる事はないため、消毒等の感染対策を徹底し、存続に向けて少しずつでも絶え間なく練習は続けてきた。継続して行って来た事が、現在も続いている要因の一つである。

### ＜今後の課題等＞

秋の奉納（10月）に向け、毎週日曜日の9時から11時に練習を行っているが（平日の18時等であると、皆、仕事などの都合で集まることが出来ない為、日曜日に行っている）、今後の課題としては、人集めが挙げられる。獅子舞は地味な為、なかなか報道等で取り上げてもらえず、例えば県の催しとして、県内の劇場に各地の獅子舞を集結させ、獅子舞大会の様なものを開催する等、県として周知を推し進めて行くことも必要なのではないかとの声が聞かれた。

### 【天狗面・獅子頭】



＜ 天狗面 ＞



＜ 前獅子 ＞



＜ 中獅子 ＞



＜ 後獅子 ＞

### 【秋の奉納時(令和5年10月22日)】



＜伊勢島神社 境内にて＞



＜お伊勢の森にて＞



### N0.3 天神の獅子舞（てんじんのししまい）

（高崎市指定重要無形民俗文化財 昭和 55 年指定）

所在地：高崎市新町

伝承組織：新町八幡宮獅子舞保存会

調査日：令和 5 年 10 月 7 日（土）

#### <歴史・芸能の特色>

天神地区（2 区周辺）の人達によって伝承されてきた稲荷流獅子舞で、雄 2 頭、雌 1 頭の一人立ち三頭獅子舞である。獅子は鳥羽を飾った頭をつけ、タツケ袴、白足袋、草鞋ばきで、腰太鼓をつける。元禄 4 年（1691）、落合宿で八幡宮再建のおり、新町産の一本桐で獅子頭を新調したといわれている。獅子 3 頭のほか、天狗とカンカチが加わり、笛の伴奏で舞全体をリードする。

祭典時、天神様、八幡宮を参拝し、神宮に祓い清めてもらい、舞を奉納してから上三町の祭会所で舞を披露する。演目は、公民館から神社までの道中、正門から駆け上がり、本殿での舞い、輪になったの舞、花の蜜を吸う花吸い、おいとま（お辞儀）等があり、全曲を通すとかなりの時間がかかる。全体の中で、雄獅子が刀を用い、雌獅子を取り合う「剣の舞」が、大変珍しい舞である。

#### <復活に至るまでの経緯・伝承状況>

平成 18 年の落合八幡宮の秋祭りでの奉納、新町伝統芸能発表会へ出演以降、活動停止が続いていたが、平成 30 年（2018）、「ふるさと創生事業」の一環として新町文化協会が催した発表会の中の出し物で、獅子舞が上演された事がきっかけである。この事業は、中学 3 年生の 1 クラスを、武者行列や手話等、各項目へ振り分け、それぞれを特別授業の中で学び、体育館のステージで発表するもので、「伝統芸能」の項目で「天神の獅子舞」が取り上げられたことによる。特別授業は 7 月よりはじまり、夏休みを挟み、9・10 月と続き、10 月末の発表会に向けて行われた。この取り組みは翌年も行われ、2 年続いての発表となり、篠笛については吹奏楽部の女子を中心に積極的な取り組みが見られた。

この事業に「天神の獅子舞」が取り上げられた事は、当時の校長先生が新町出身の先生であり、伝統芸能への活動に積極的であったことが大きな要因と考えられる。

その後、新型コロナウイルスの影響もあり活動が出来ない時期もあったが、教える人が居なくなってしまうと途絶えてしまう事もあり、令和 3 年（2021）の暮れより練習を再開させ、現在に至る。昨年（令和 4 年）より高崎市獅子舞保存会連絡協議会に加入、また、本年、市の助成金を使用し、獅子頭（角の部分）の修理を行った。

現在、まだ奉納には至っていないが、毎年、八幡宮秋祭りの際には獅子頭の展示は行っている。

#### <今後の課題等>

現在の保存会の構成員は 6 名。毎週第 1・第 3 土曜日の夕方 6～8 時、大人 3・4 名で篠笛の練習を行っている。以前は新町には二つの獅子舞があった。（八幡宮の獅子舞の他に、諏訪神社の獅子舞も行われていた。現在、後者は行われていない。）今後、獅子を舞う子どもを集めるため、育成会より回覧板で募集案内を回してもらおう予定である。今までは、第 1・第 2・第 3 区の上三町の子どもで行っていたが、これからは、全町を通して、舞う子どもを募りたいと考えている。（回覧板で全町へ募る予定である。）

## 【 獅子頭 】



＜ 雄獅子 ＞



＜ 雌獅子 ＞



＜ 雄獅子 ＞

## NO. 4 大峯神社太々神楽（おおみねじんじゃだいだいかぐら）

所在地：前橋市嶺町

伝承組織：大峯神社太々神楽保存会

調査日：令和 5 年 12 月 12 日（火）

### ＜歴史・芸能の特色＞

江戸時代末期頃より伝わった神楽で、演目については、下南室太々神楽（渋川市）より取り入れられたと伝えられている。昭和 35 年頃に一度中断したが、昭和 48 年に当時の青年団をやっていた仲間 15 人位により引き継がれてきたもので、その際に 4 つほどの舞が無くなったが、「大祓」「天狗の舞」「四神」「鈿女」「岩戸」「鯛釣り」「小屋根」「鍛冶屋」「火の神」の 9 座が受け継がれた。中でも、集まった子どもたちにお菓子などを配る「鯛釣り」の舞は、“ひょっこ”や“カップ”も登場し、大変賑わう演目であった。また、以前は神楽の奉納日にあわせて、バザーやうどん作り等町のお祭りも行われ、町全体が大変な盛り上がりを見せていた。

実施時期としては毎年 5 月の八十八夜に行われてきたが、少し前より子どもたちがお菓子を拾えるように日曜日にずらして行っていた。嶺小学校が芳賀小学校と合併した 2014 年度以前は、神楽見学が嶺小学校の学校行事の一環として行われており、また、保存会員が学校に出向いて神楽舞を教えていた時期もあった。

神楽殿は町全体の応援により平成 7 年頃に新築されたものである。保存会員の中に大工さんが居たこともあり、地元住民によって建てられた。また、神楽面については神楽殿竣工後に残った資金で地元有志により作られたものである。

## < 存続・伝承状況 >

今現在の会員数は6人ほどで、皆70歳を超えている。コロナ前までは自治会長が神楽の代表も兼務して行われていたが、コロナの時期に笛の吹き手が体調不良で不在となり、また地域に子供もいなくなってしまった事もあり、令和2年より休止となった。

現在の嶺町の戸数は約210位である。芳賀小学校との統合により嶺小学校は閉校となったが、芳賀小学校の来年の新一年生は10人位とも言われており、地域として見てもかなり子どもが少ない事が伺える。(この地域は農地が大部分を占めている為、新たな住宅建築が容易でない点も人口減少の原因の一つであると考えられる。)

全ての演目を舞う場合、舞い手が最低10人(以前は人員不足の関係で3演目を一人で舞うような事もあった)、お囃子も専門の奏者が(特に笛吹きは3人位居ないと続かない)必要となり、衣装も一人では着られない等、多くの協力が求められる。芳賀地区は10町あるが、他に神楽は存在しない。休止前は基本的には嶺町の住民で行ってきた芸能である。今後、他の地区から若い人に来ていただければ歓迎したいとの意見もあり、やはり地元の住民で続けていくべきだとの声もあり、保存会員の中でも意見が割れている。現時点では、芳賀小にまで行って教えたりしようとは考えていない。

衣装や道具等は1年に1度位、虫干しを行い、継続して保存していきたいと思っている。

## < 今後の課題等 >

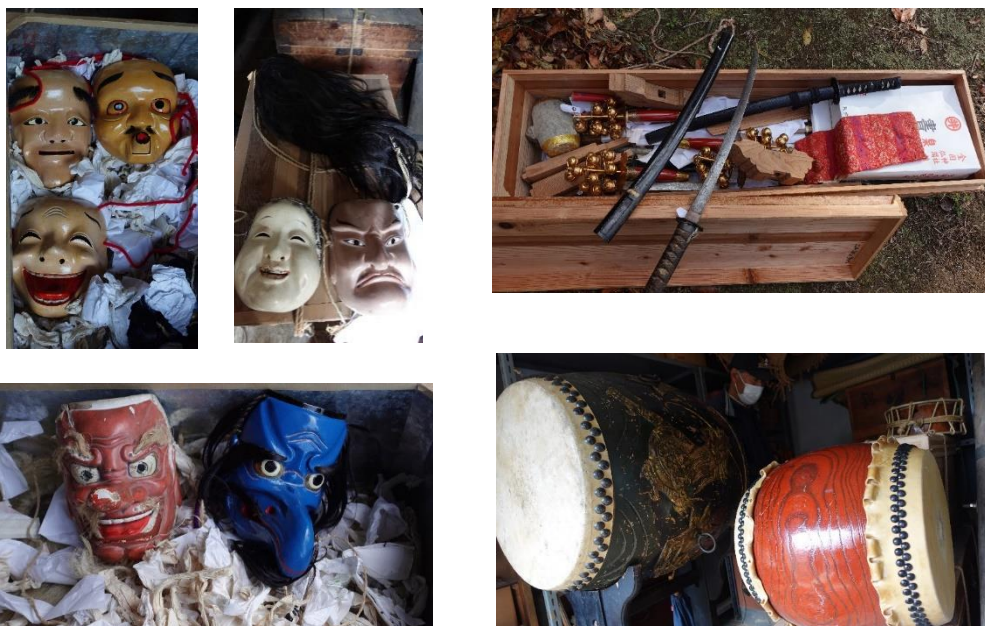
一度中断されていたものを昭和48年に引き継いだ際も、中断前に行っていた先輩がまだ残っていた事が継承の大きな要因であった。現在、人数は少なくなっているが、まだ保存会の方々(経験者)がおり、復活の可能性は残されている。神社の紙垂も12月23日に変わり、公民館も綺麗に整備され自治会の活動も盛んであり、保存会の方々の次世代へ伝えようという意気込みはあるが、戸数の減少、少子化、若い人がいない事には後継者への伝承は難しいのが現実であり、担い手不足が喫緊の課題である。平成21年に作成されたDVDが残されており、復活する時の参考となる貴重な資料である。



< 境内にある案内板 >



< 大峯神社本殿(左) 神楽殿(右) >



＜ 神楽面や太鼓・小道具類 ＞

## NO.5 袋倉獅子舞（ふくろぐらししまい）

所在地：吾妻郡嬭恋村袋倉

伝承組織：嬭恋村消防団第9分団

調査日（電話）：令和6年2月6日（火）、2月27日（火）

### ＜歴史・芸能の特色＞

『嬭恋の自然と文化』の資料（平成14年、当時の嬭恋村郷土資料館長 松島氏取材時資料）からも、何十年と長く続いて来た伝統的行事である事が分かる。この獅子舞は、元来、初午前日の祝宴であった。昔は青年団（20～25歳くらいの若者）が行っており、その後、消防団員へと引き継がれた。午前10時頃から住民が花や万灯作りなどの準備に取り掛かり、午後3時頃より獅子舞を演じる消防団員の人も集まり、酒で身を清める等支度を整えた。午後6時頃より、先導者、続いて獅子、その後に鉦（かね）や鐃鉢（にょうばち）、振鈴（しんれい）などを持った囃子方（はやしがた）、そして随行者、最後尾に“おひねり”などを受け取る“門付け”に編成された獅子の一行は公民館（生活改善センター）を出発、順に家々を巡った。（巡回する順番は、上袋倉・下袋倉を交互に行っていた。）おひねりが渡され、中にはお酒やお米を振舞う家もあり、米担ぎが行われたりもした。午前零時頃、無病息災と豊作を祈る袋倉の獅子舞は無事終了となる。以前は消防団員も23名ほどいたが、現在は10名程となり、人員不足が今後の課題の一つでもある。（若手がない）

獅子は、「箕」（農作業に於いて穀物を袋に入れたり、選別の際に使用する容器）などを利用して頭とし、手作りで作成したものであった。地元の区が中心になり消防団に依頼して行っており、日程については2月か3月の午の日の前日としている。消防団員が行う為、縁起等により「丙午（ひのえうま）」の日の前日は避け、「壬午（みずのえうま）」か、「戊午（つちのえうま）」の日の前日に行う事としている。

※令和5年度は、令和6年2月23日（金・祝）に実施が決定



#### <新型コロナウイルス感染症の影響と今後>

新型コロナウイルス感染症の影響により、ここ 3 年間は行っておらず、一時、廃止の声が上がることもあったが、令和 5 年度、内容の見直しを行い、昔の様に家々を巡回はせず、初めての試みとして公民館で 1、2 回まわるかたちで行う事が決定となった。令和 6 年 2 月 23 日（金・祝）、おおよそ 2 時間の祝宴の中で 2 回に分けて舞い、区民 50 名ほどが集まった。初めての事もあり、大変賑やかに盛況のうちに終了となった。来年度以降も、今年のように公民館で舞うかたちで行っていく予定である。

#### [調査を振り返って]

今年度の実地調査は、前回平成 30 年度に行った悉皆調査から 4 年の間で継承状況に動きの見られた伝統芸能を中心に行った。新型コロナウイルス感染症の影響のみならず、少子化・後継者不足、会員の高齢化、子どもたちが参加しやすい環境づくり等、さまざまな課題が聞かれ、厳しい現実を目の当たりにした。一方で、一度中断となり、その後復活を遂げた団体からは、一旦休止してしまうと復活させるのは難しい為、少しずつでも休みなく継続して続けて行こうとする強い思いと地域との連携の中で上手く行っている例や、学校教育の一環として伝統芸能が取り上げられた事が活動のきっかけとなった話し、従来の形態ではなく時代に合ったかたちに変容させながらも続けて行こうとする取り組み等、団体の方々の継承への熱い思いの中での活動の様子が見て取れた。「やっている事が分かると止める訳にはいなくなる」との声も聞かれ、それぞれの地域の定例行事以外にも発表の場や、若い世代や伝統文化に馴染みのない方々にも何らかのかたちで伝統芸能に触れる機会、興味やきっかけづくりを設けて行ければ良いと考える。時代や人間の生活の営みの中で育まれてきた伝統芸能、日本の文化を継承させていくために、何が出来るのか改めて考えさせられる結果となり、今回の調査を今後の継承や存続へと繋げていきたい。

令和 5 年度伝統文化継承事業  
ぐんまの伝統文化調査報告書

公益財団法人群馬県教育文化事業団  
〒371-0801 前橋市文京町二丁目 20-22  
令和 6 年 3 月

---

限られた条件での調査・執筆のため、  
誤認や誤記があればお詫びし、今後補完してまいります。